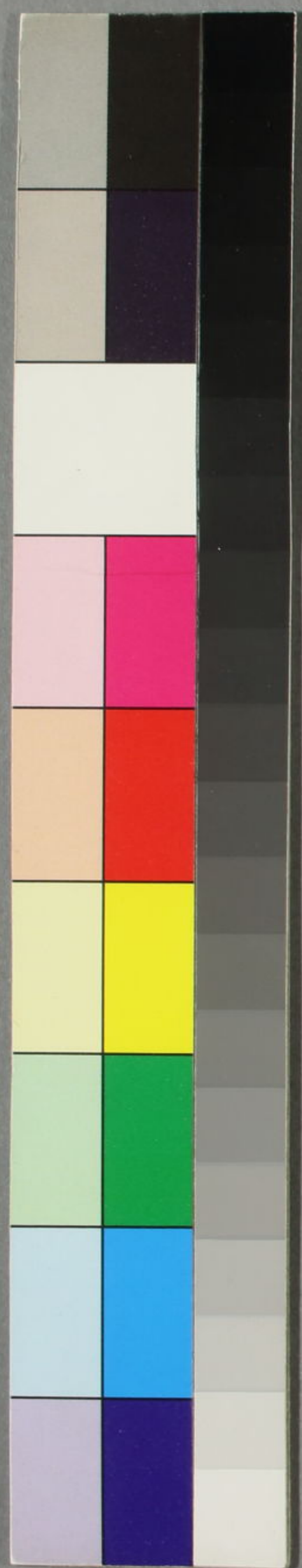


觀音守護寶劔三

~ 13  
3707  
3



門へ13  
號3707  
卷 3

天縁奇遇卷之中

東武

柳亭種彦著作



第三回

大正十年八月廿九日寄  
本大學出版部贈

却説米吉の母の行衛の覚束多く只姫君の母上とこれらも吟ひ  
つれとよ呼竹まぶ臥しつ足摺りて敢くともども未だ浦の西東は  
ごま分るるのべしつとて尋ねてさうりありありの往来の  
人ほく向ゆやせんと兎見角見切又父の亡骸もこのまに研上り  
曝すとと幼い子も配とてさうりも嗚の孤も如何もよしとせ  
無りぬべし候ふちやびつ茫然とて立居たり茲とされどと  
夕暮は寐ぐりもつら群鳥の可哀と嗚り行くこ見らぬ情もや

天縁奇遇卷之中

春時が死骸の上を群り来り齧り鳴しと啄んとくねとるる飛  
 中くは米吉見りより走り寄り追つ拂ひの駆廻ると次第鳥の  
 友と下り重あればさそふもしとひあててとくと坐しあて  
 汁はほろけぬ斯くはほろけさまう死骸は土中へ埋めんと  
 春時が卧し傍の砂とを右へく振りけく取小なる手のらさ  
 指りて地中と掘くへる皆爪先の皮肉は破りて砂子も赤染成  
 ころども親と思つるわんが更ほ煩しきまどの為て宛も蟻の土  
 めりて已み一歩むりの穴とくねばやう死骸はあち押し  
 押し斬く窪くは轉し添や群る鳥の忽は代孝いと感しや啄む  
 痛は翻し皆口くは土と含み死骸の上を持運びぬ余多の鳥の  
 斯くは頼り成らぬ頃更ほ尸と埋り隠しめよ平ゆとあう

くり斯く處へ鬼塚道見賊と覺しと分抄るるが刀は腰は横と  
 まづくと歩み来り米吉は見え向ていらくは如何なる者の  
 子もぬが斯く人気が見ぬ荒磯み夕は待得て行くぞ我は傍  
 住居する買入るるが元来金銀財宝は身は貯へ何不足なく世は度  
 らん子とりあものほろけぬが如き幼稚は見る毎に愛は加ふこ  
 我が子のごとく思ふありそれがはれ我が行方に来りあが速は美服と  
 りて其身は纏りも珈琲は与り飽やうも肥さへ疾我が方は  
 来しとやと米吉が手に携めぬがわんわん候と流しりつこ  
 りある御方らまうもども実是有りき御定りる我が固より名もあは  
 めの子なりくれば左程の電を受ぎとも便さる身は助るるわんか  
 君が方は参りぬしはひあつれといとわんがまあめど心の

内々さあぐに父は埋めし浦のさうぐ〜唯程近き傍らありぬこの  
 まてらあぐも随ひゆ孤を世に哀るぬ夫の物置茲は讃州支度の  
 也子毒虫の勘太と云ひて世にさうぐ〜悪漢あり遠近より童男  
 童女は買とりて是は中西四子賣渡し大に利潤とむるが  
 伴に家富りし時子鬼塚道見の彼の米吉に猿轡と舎を或夜  
 此勘太がゆと引来りて疾賣渡さる〜云ひ入るが勘太  
 出で是と迎へ先米吉は熟見する色白く鼻筋通り〜眼中珠  
 美り〜是適の金箱みりとの内は〜歡び手のさあ〜足の  
 け〜やうなるも〜尽く見畢る身の中一点の疵はさあ〜やが  
 十分の價と出〜道見は是と度〜其終茲は買置り〜斯と  
 歳り〜過さる彼の圓の入買共交〜入来り〜天去る豊

腹は愛めぬが元の價は十倍〜買取〜とを競ひあ〜これとも  
 勘太は今少〜長〜なは莫大の利と〜んと謀り〜は  
 四歳の星霜は重〜其後難波の坂町ある色子に社の賣渡りぬ  
 それが米吉も大〜や拾歳とすぬ程あり色子の形  
 仕立〜面に白粉は粧ひ身は紅の紡と〜旦暮糸竹の手業は  
 試〜彼の花井まの娘が躍のう打學を〜然るも米吉は追て  
 挿勇の気性で現〜やしぬが尺八の笛も〜他の色子の頭は  
 碎き又或時の琴は〜嫖客は打居へ打〜色子は似なき  
 振舞の〜多〜なは遊藝の道は疎く唯力量は〜さ〜ま  
 らは委〜居〜し〜主し殆果果今の唯賣り〜主へ返さ〜ぬ  
 如〜其後横州へ人は馳不〜價は償〜ぬ勘太が許さぬ

天竺奇聞選卷之中

送り返すの右又色子と商ふ所と云へば彼方は方の厭ふ余多度  
 米吉の賣り度しうりくれど皆先のときおちちほく是が許り  
 送りくちを勘太の大名怒りおちちほく米吉とくく傳の庭上  
 引居へつ花棒はやりゆらん丁ころと打擲く其手の下も  
 はく云く実子御憤りのさるもれども我の固より甲賤の身も  
 彼の美服は著珠味は食し朝夕は糸竹の道は学ぶものあり也  
 飲りの薪は担り水は荷する業ある命の限務とべしとくくも  
 さのら疾賣度しうれとぞ戻あうにき口説めさるが汝山に  
 行ふに五十把の薪は荷れ川よりもに五十荷の水は運ぶ先我が  
 方は曲びし君難しとる此のどく速に打殺さんとく又捻棒は振上  
 れば侍あへ必命ども程薪水は荷る唯縛めはむのくとく仰る

昨ら打たさば漸くに整ぐる繩は切解き一の鎌は持来りて米吉は  
 是一板け後の山は行りしれが領掌しとく立出是より日く日  
 山中と馳廻り多の薪は荷取をどし五十把は備ふる時を是は  
 食度と与へる口は唇る俵は飢腹を物身尽く肉脱し艶る  
 姿引く彼の阿史仙は夏する太子のむりくやんとおちち  
 ころのありゆりこれ米吉の菓は喰ひ水は飲漸く飢渴は  
 凌ぎら兼て剣法と学ぶのち掛ありし是究竟のころを  
 あまこの大木と合まると本来の棒は木太刀と定めく寧ろ敵は  
 向ふと奮然と身は堅め或る霞鳥飛び上段下段青眼の一本  
 毎工夫は廻り偏み務む疑しとる宛も舍那王の再来と  
 疑ふ古語は所謂後幾先至のおちちも向はるくさき

會得し其上方量他の人子越くくは是より五年は過ぬ中連れ  
一箇の勇士と成りたり

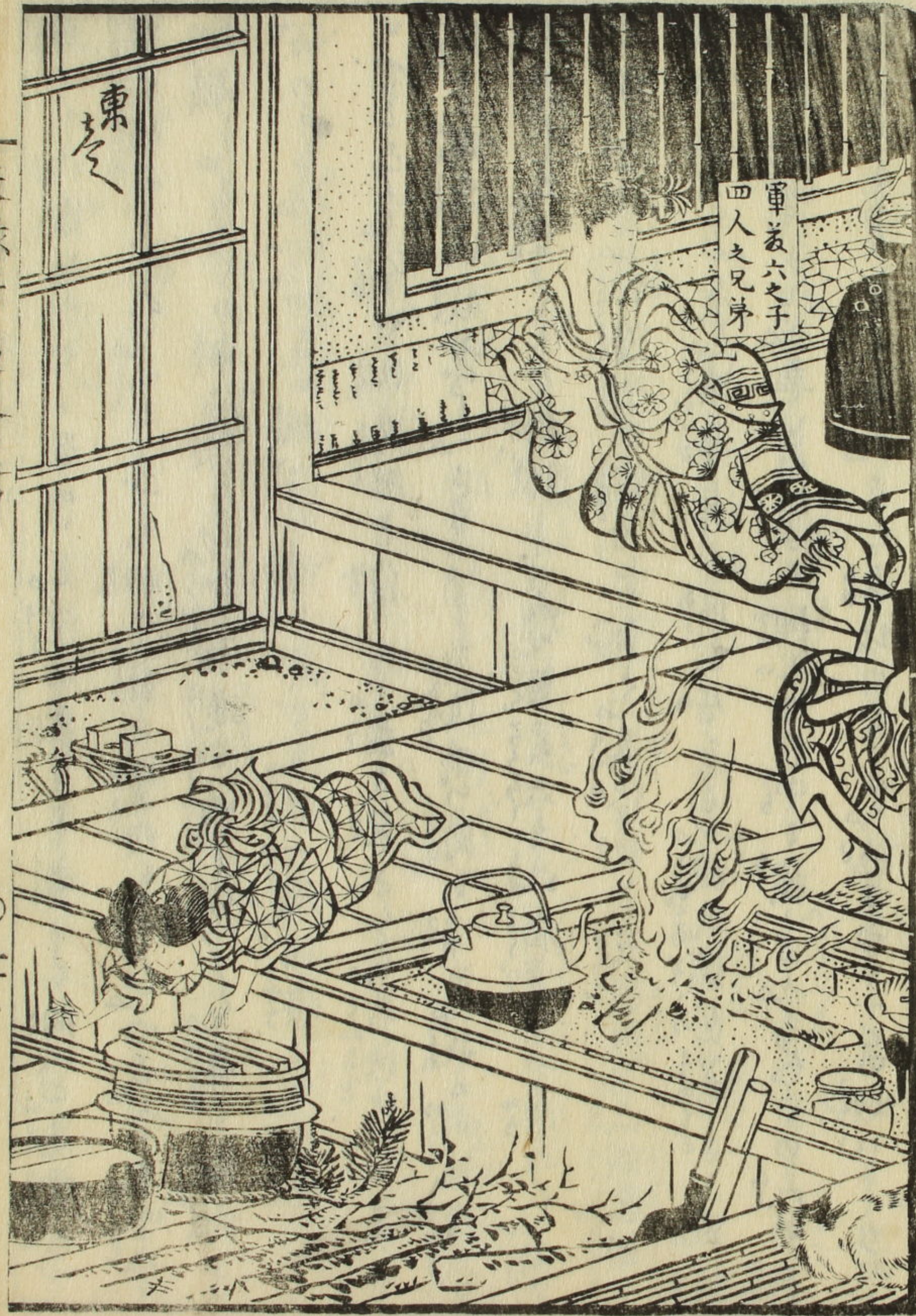
第四節

茲は横島軍六回同く讃列支度の浦日樓以求め通見とらと  
合せり商人の形をか抄奪の海賊と作業とて密に徒黨を企  
くは夫婦の兩様の人は非ざとせざる壁へのとて是の妻あり  
野風と云つる邪智候く寵とくする本性あり常は奸計を廻し  
餘多の人を害すことまはるく世に類なき賊婦とぞはるる  
其子拾式とてわたりて四人の兄弟はもこりたり始の二人  
女子とていと美りてくもをすくはるる生長ぬ物野風ははる

風の心地は打卧し或の悪寒或の痰熱夜昼とてくくくく  
堪ふは様態あら敷りは懸るは病の愈へくくく軍六  
さくは希く忍びぬが二里行て茶とゆへ三里回ちくく医家  
尋ぬ種くは治療はつすはくく病の次第重りつ物身くく煙度  
炭所とて血を漏ぎる如きもの出来たり是咲華が怨靈の為  
所と露をりり知らざりぬはくく奇病は治るべき良医は何方有  
めかすとあへど煩に軍六がらの内患も又はゆへくくかりも  
軍六が手下は仕る鯨藏もの遊来くく云ひたるははら  
は路は名医出くく克く万病は救めとせまぬ名と池見雲齋を  
りつる今世挙くく生某師と尊敬やと速に呼ぶくく阿好の  
病いと治せぬ何如我彼の名医の奇驗はすくく瘡と愈て

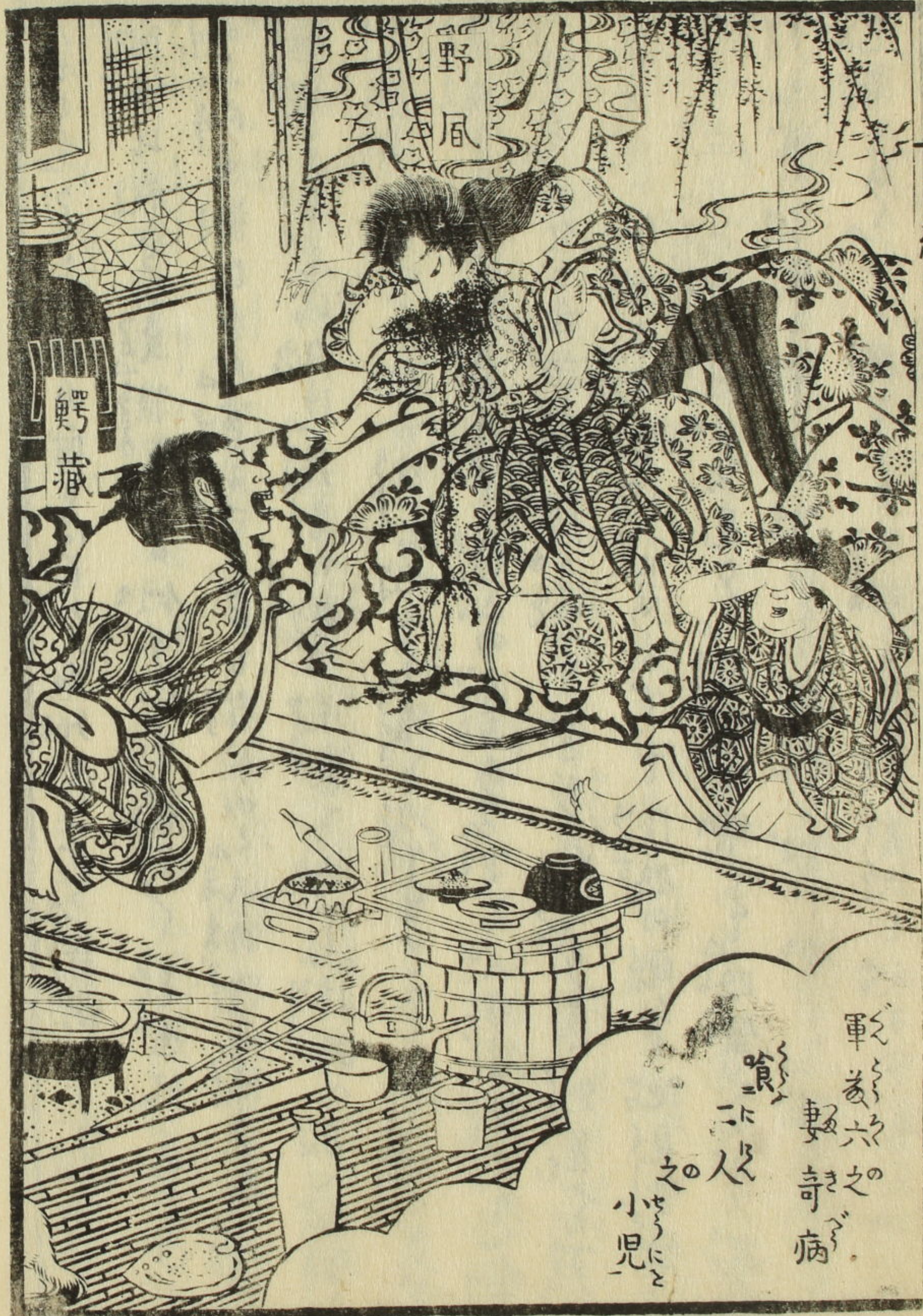
弁舌と爽りみり、聾は治し、忽耳竅と通ず、河内の國に  
 ある剛家の主人の身、まうり、親族、尽く打穿り形見と分ら  
 取んと、代黄金と、我々と遺し置、あつ、ほのまらふ、これと  
 いひあひつ、杯口く、云あつ、誰と多きと分ると競つ、まふ  
 口論は引出し、己は訴、詔み及ぶ、趣き、或人、す、今、  
 死人、口あり、争ひ、あも、無益、な、べ、唯、冷、洛、の、名、医、  
 何某と、な、や、一度、亡者、と、生、ま、如、る、と、制、り、ま、  
 来、り、然、く、の、由、は、告、れ、各、医、の、安、と、膏、と、  
 亡者、の、新、塚、と、堀、と、共、に、亡者、を、取、出、し、診、脈、し、  
 一貼、の、藥、を、与、へ、試、し、ん、が、ゆ、の、ど、く、は、生、つ、つ、厚、と、一、  
 貼、と、述、べ

阿姉は殺さく、支情、ま、似、く、疾、く、名、医、の、  
 唯一向、は、翻、し、る、事、も、有、り、め、は、物、語、を、感、り、  
 野藏、は、留、主、を、預、け、其、身、の、旅、の、用、意、を、  
 夫、悪、僕、の、世、の、話、と、出、る、確、と、以、て、こ、こ、  
 虚、況、と、信、し、人、と、感、し、誘、の、過、ち、あ、り、  
 夫、物、置、き、重、六、の、信、が、ま、則、差、か、  
 許、子、三、り、先、屋、の、様子、を、見、る、破、壊、し、  
 下、み、彼、の、名、医、と、覚、し、唯、ひ、と、寫、然、と、坐、  
 乞、者、も、く、く、度、し、有、様、な、軍、後、六、七、大、子、  
 不、審、く、



東

軍後六之子  
四人之兄弟



野風

鱈藏

軍後六之  
奇病  
喰  
二人  
之  
小見

飛騨繪巻



正しくいふは、いかにやせしめるめし、傍の家を委しく向へど、是雲あか  
棲り、終あし、ごんがら、あし、でも、頓て、茲に、案内と、こひつと、入りて、雲あま  
面、濁し、らるくの、由は、語ら、雲、あ、速、唯、く、い、く、垂、く、海、内、く  
病、め、もの、何、如、ある、難、治、の、證、と、い、へ、ども、我、一、度、治、療、し、て、更、生、せ、ざ、と  
い、ふ、と、あ、し、今、や、は、遠、路、と、侵、し、て、茲、に、来、る、と、い、ふ、我、は、は、情、ま、く、で  
往、て、病、者、に、救、め、ざ、ら、る、に、も、は、や、が、四、日、を、歸、き、我、の、明、朝、幾、足、り  
及、ぶ、し、と、重、く、く、約、諾、し、り、れ、が、戰、後、六、七、は、廣、言、り、や、恐、れ、く、偏、り  
三、拜、九、拜、し、物、落、所、の、宍、所、と、告、ぐ、其、後、茲、と、立、出、り、て、賊、医、固、り  
一、人、の、僕、が、る、ま、く、唯、妻、と、い、ひ、匹、居、と、ら、る、が、猶、は、賊、医、甚、く、嫉、妬  
候、き、本、性、な、れ、が、妻、と、い、ふ、は、押、入、り、の、中、に、藏、し、て、あ、く、く、の、人、の、態、  
對、し、て、あ、く、く、り、く、く、と、妻、は、の、こ、し、を、他、に、あ、く、く、の、煩、ハ、し、り、れ、が

今度の留主は、もつらにせんと、死ぬるなり、いひ、勞、一、居、り、の、風、と  
思、ひ、寄、り、め、ら、る、さ、い、い、僕、も、愛、さ、と、ら、な、れ、が、則、渠、と、僕、は、仕、立、て  
連、ゆ、く、づ、し、この、夏、の、妻、に、も、さ、や、さ、巴、は、聖、口、の、朝、も、も、あ、れ、が  
申、斐、く、敷、旅、し、も、い、一、妻、は、が、忽、奴、僕、さ、く、く、へ、候、く、と、三、打、着、せ  
某、の、箱、と、脊、は、負、せ、て、横、岐、の、國、へ、を、赴、き、**軍、後、六、日、先、づ、ら、て、我、が**  
家、を、歸、り、先、野、風、が、様、態、と、尋、ぬ、る、鮮、藏、と、い、ふ、め、と、く、く、兄弟、の  
子、供、も、唯、待、り、待、り、の、る、氣、色、に、も、口、を、生、か、す、い、へ、く、病、殊、に  
ひ、づ、く、く、其、上、氣、世、猛、り、な、り、て、傍、の、調、度、は、投、散、し、夜、も、猶、顔、色  
鬼、の、ご、く、み、變、じ、も、我、が、子、恋、し、と、は、喚、び、ぬ、斯、く、さ、う、い、ふ、この、度、重  
く、い、は、や、が、我、が、さ、く、く、い、は、も、末、の、子、に、り、は、与、へ、る、是、は、見、て、  
嬉、し、げ、な、懷、き、抱、へ、い、の、の、我、が、子、あ、ら、り、の、我、が、子、や、と、い、ふ、と、見、れ、が

忽に小児の頭はわしと啗碎きぬあまやと六ひき引かんを共  
己に小児の一色をひびく死ききいりよともせんうらまへ身のもも疎  
心地しきふぐ傍に見居るも尽く食ひつゝ完尔と笑へ  
有様恐ろしあんども思ひなほ其後病者すやくと寐入らるる今日  
起らるるも見えぬ外子細もさうりつと怒れも軍後六  
すくも肌身のさうくと物冷くつるあま難病はやほらん且驚き  
且怪んぞ憐然と患ひ居る物冷路の始末ゆめごころ兎角し  
口も慕れ行燈の火と灯ぐ病者の床は窺ゆる彼の小児と食に  
くれ口の圃手足の端が尽く赤きありて鬼の卧しころごとくなら  
らる不祥は見るごまほると此夜は折く家の鳴きありて  
偶に女のは喚く色あどきありな夜更にまゝ兄弟の子供

争は床をさるる物もやめられん寤る夏の甚く  
廝の中ら生首と見る夏あり其外妖怪出ると頼りあは流石の  
軍後六も何とやん気味悪く此夜は明しよと野藏は姦  
とめ其身の慟く一遍の念仏しを居たりける時子妖しや側々に  
卧しる小児の一度は手足は動めしほろりと色あは院の子く  
あど云ひく金衣の上より撫摩きどゆりく向へ苦く野風の方  
後髪は引寄せられ病者も怒りつくと起き色青ざめる手は  
このべ一八の男子と捕ちと見えし又肩先より喰裂る皮肉と  
左右へつゝと見ると見ると軍後六は大笑り病者も取  
押しと腕を振りて飛ぶれ口より燐と吐けり更にあつて  
寄せ付けし唯は見くと匂りつゝ血は染む口の耳も裂て歯本は

落りて其顔色悪鬼羅刹に欺むるなり足は面に向つべき様ぞあり  
その野藏も大に懼きしに生くる地もなき所の袂と頭  
霞ひ軍後六が路にさしつゝ身は揮りて打卧しり物又病者の彼の  
引裂くる小思はものころき喰ひつゝ其体ごとと倒まきし  
程多くは夜も明もこれが軍後六はと溜息つき茫然と居し  
かゝる妻の難病にさしつゝ月多々の金銭を費せが今其口の咽  
立ちて思ひしと滑りていそが貧苦に逼りなればさう兄弟の  
娘をも喰ひぬれ先に賣らんてさしめとやが彼の勤太が  
許に二人と連行きしはさしめはさしめ家にくる猶もさし  
人の財宝を盗みし時節もさしめ例の悪念哉一、周に工夫以學  
所み外のさしめ言ふも世見雲霧が来きし一、云入の軍後六

周章く出迎ひしはさしめと伴ありさしめ雲霧なるも重く  
八助もねまゝさしめと妻のやもさしめ目に見やつゝヤガ  
坐敷へ打通りぬ物軍後六は皮度の勞は謝し酒肴は設く是は  
饗し兎角く病人と見せしむる彼の小思と喰ひさしめ  
惣身尽く血に染しはさしめ故とも知れし十分は診脈し熱と  
面を赤退りし云ひるさしめ是寧ろ奇病なり毛竅節次も血は  
出る若試のさしめ血出ざる時皮脹癰と鼓の如くありさしめ  
名づくる脈溢病と云ふ是寧ろ奇病なりさしめ然りとし予が一度  
良薬は調劑やが連め皆愈せんことを疑ひなす汝謹て薬は服さ  
さしめ更は病へ而しては費は惜しことさしめ命と財といふれ重き  
必しは弁しやくと示し其の邪はさしめ寄せり軍後六

先より平如のどくりに伏し言はせとらんとて傍に通辞たよ  
 けり如何ある由は語りて弁へて只唯の唯のそぞろ  
 くる雲衣の恭しく箱は披き中より生姜の入る袋は取り出し  
 じゆり底はこくまぐめりて紙に捲りて与へられは僅は是は  
 受野藏とて連は煎やも軍後六が雲衣にりて斯く  
 遠路は厭いぞ来りあり程あれ五三日とぬりありて療治は施し  
 ありんやさほく我が幸この過ることほくはと眞実の報もれが  
 雲衣も疾く病は去りて爰に逗留とて定めけりこれが軍後六も  
 大に飲む先連あつる僕どのは休息とて次ある一向に招き入るは  
 野藏も是はのりり茶菓もど与へりて雲衣の例乃  
 嫉妬の心起り密に考へ思ひて斯く知りぬ方來て妻は彼方

雲衣の氣遣はるる今更に我が妻と明さん程り  
 面目もろくし速に帰んはとて既軍後六日告  
 して我今日の四行も急病人の病を忘る今を  
 へての叶ふに僕にも帰る用意はさそもりて  
 堰立て軍後六も又何れ何れ何れ今より幾足  
 あり如何あり急病は救ひありや仏更に行や所を  
 著ありんてや次の向は寐とて見苦しく共曲  
 する様態もれや微塵も動らざる雲衣もせんく只黙然  
 とありありと微塵も動らざる雲衣もせんく只黙然  
 坐一居り軍後六又野藏に對して昨夜の看病も出ぬ  
 今宵の名医のやうに我もよの強きを疾くけり

一向に入りて僕いふ、打著る浦團のまゝにやのむごさるりへ君  
 用まひふ起出よとんは床を寝るんが野藏もまゝく暇に  
 一向に入りぬ時に病者も痛も禁も服も刺へ盛る器も粉の  
 ごとく打碎き憤然と怒りは為すや又起ると軍後六も  
 懼ぎ恐れ一ひ念仏ゆり唱へ居り然るまや不思議成  
 更も野風が面彼の血を洒ぎるをうりに見え癩疽の  
 腫る所の程に裂り別に一の口と生ドを歯尺  
 備り其口より腥き臭吐と頻りあし哀哀き  
 声は放り我が子悲しと喚出ぬ見内子面部へ口は生ぞ  
 更四つ五つをうりも腹にも脊にも手足にも同じくあまの  
 口を生ドに九十九口を成りころる皆口をく我が子

悲しと喚び出まは宛も雷の落くるごとく其色室にやむし  
 他の村里も歩きたはるも病者が睡ぬが敷口も  
 共に黙しとまらぬ軍後六の室の見るまゝ身は  
 揮やぐあきり其中に雲々の唯妻が卧しる一向の  
 裡の嫉し怒りゆ包むに忍びぬ或の立或の坐し狂気の  
 如く見えす所に彼の啼き方に女の位居る声あり  
 家鳴り震動も唯とあまど覚えず何多うの更も気上りそ  
 其何と倒れまら次に向り野藏が片息に欠出あま  
 恐ろしやと轉び卧ま夫と見よう軍後六に周章も野藏が枕の  
 りと近くより更の子細を尋ぬ野藏の歯の根も今め斬りに  
 語り云くうれに卧しる雲霧老の奴僕も止く化生の

のあるべし。啼きさうなると、克く見れば、首の忽と変じて、膝の  
 則、奴もううと、寐入と起さぬ、うめ取りと打擲し、正体は  
 見、黙りて、さうと、疾く、淵のまゝと、堰子せり、告ぐ  
 ぐ、軍、六も、身、構へ、壁に、けり、繩も、一向の、裡に、け  
 入りしが、肝し、女、引起し、高手、小、手に、さし、め、斯く  
 窮、藏、始、人、地、つ、ま、い、で、く、変、化、見、ほ、く、無、二  
 無、三、に、女、は、捕、へ、握、り、拳、と、打、當、く、余、の、限、責、り、る、女、は  
 こゝろに、思、め、う、け、つ、と、か、の、半、の、生、ま、の、死、も、現、共、弁、へ、ど  
 小、婦、に、何、の、咎、は、り、と、憂、目、見、せ、め、我、が、夫、の、何、方、に  
 在、コ、ヤ、と、や、く、い、ひ、助、さ、と、さ、声、は、り、上、呼、べ、ど  
 與、一、情、あ、や、雲、霧、の、先、に、岡、絶、し、り、外、に、す、人、な、ら、と

